

## 別編 1 尖石遺跡・与助尾根遺跡発掘調査に関わった人々

尖石遺跡の調査研究は、明治時代から多くの研究者や地元民との関わりの中で進展してきている。その中で特に宮坂英式の発掘調査に主体的に関わってきた人物を中心に経歴を記述することで、尖石遺跡の研究の流れや保護保存・整備の経緯と周囲の協力関係を整理することができると考えられる。

併せて、時代ごとの画期を軸に関わった人物について記述し、尖石遺跡・与助尾根遺跡の研究史をより立体的に語ることを目指した(註:1)。

### 第1節 黎明期の尖石遺跡の調査者

#### 1. 明治時代 尖石遺跡の調査者

明治初年期尖石遺跡の報告者として小平小平治を挙げることができるが、慶應3(1867)年豊平村下菅沢に生まれた木川寅次郎も考古資料の蒐集者として挙げることができる。寅次郎は明治19(1886)年には東京人類學會に入会し、教職に就きながら東京人類學會誌に遺物の紹介を行っている。明治27(1897)年、小平小平治の妹と結婚し義弟の関係となっている。

なお、木川は自らの採集品を東京人類學會に明治26(1896)年に寄贈し、その中に豊平南大塩の土器の記載がみられ、この中に尖石遺跡の遺物も含まれていたと考えられる。小平小平治と共に尖石遺跡の黎明期の調査者で、小平小平治の尖石遺跡等の調査に助言や指導をした立場にあったものと考えられる(文献:1)。



小平 小平治 (1867～1895)

第1図 明治24年4月高等師範學校入學記念写真(文献:2)

明治元(1867)年、湖東村上菅沢に代々続いた医師小平禎三の長男に生まれ、長野初等師範學校卒業後、選考され高等師範學校に進学する。明治24(1891)年高等師範學校に入学し、当時助教諭であった歴史学者三宅米吉に師事した。同級生には後に東京帝室博物館鑑査官となり古墳や青銅器研究を行った高橋健自がいる。

明治24年、高等師範學校に入学した年、三宅米吉の推挙により夏季レポートの「信濃國諏訪郡の古墳」が『東京人類學會誌』第67號に掲載された。この報文は諏訪郡内の古墳を概観し、特に永明村大塚(王塚)、宮川村四ッ塚古墳の出土品を挿図入りで紹介するものであった。

2年後、明治26年「長野縣下佐久郡古墳及諏訪郡石器時代遺物」『東京人類學會誌』第91號、この報告の中に「南大鹽ノ遺跡」として尖石遺跡内の雑司久保堰脇での調査結果と採集した土器の図と遺跡範囲、遺物出土層位等を報告している。この報告が尖石遺跡を学界に報告した最初のものとなる。

高等師範學校を卒業後明治27年長野縣尋常師範學校の教諭兼訓導となり、明治28(1894)年には、県教育會総集會で「歴史教授」の講演を行っているが(文献:3)、10月4日肺結核のため28歳で早逝する。



小平<sup>せつじん</sup>雪人（探一）（1872～1958）

第2図 昭和15年6月16日第7回東京考古學會例会記念写真  
（左側 小平雪人・右側 小平定太）

明治5（1872）年、湖東村上菅沢に代々続いた医師小平禎三の次男に生まれ、慶應義塾文學部を卒業後、俳人阿心庵永機に師事している。明治26年阿心庵を継承するが、兄小平治の死を契機に、地元に戻り小平治の雅号「龍谷」を冠した小平治の蔵書、蒐集した土器・石器を取めた「龍谷文庫」を故郷上菅沢に開設する。明治31（1898）年には阿心庵を併設し、多くの文化人らと交友し俳諧宗匠として活躍している。著作には『校註蕪村全集』（文献:4）『芭蕉全集』（文献:5）『其角全集』（文献:6）などがある。

また、考古学にも興味を抱き八ヶ岳西麓等の縄文時代遺物の蒐集に勤め、その蒐集品は著名で、明治期探検小説などで活躍し考古遺物の蒐集家として著名であった江見水蔭の著書『探検實記 地中の秘密』（文献:7）や、鳥居龍蔵『諏訪史』第1巻に主要資料として紹介されている。昭和4（1929）年1月13日から20日東京京橋高島屋呉服店2階文化サロンで開催された『原始文化展覧會』に所蔵遺物を出品し、これが昭和4年7月、伏見宮博英の諏訪郡内考古学調査につながっている。その折には地元考古学研究者両角守一と共に諏訪郡内の遺跡の案内を務め、尖石遺跡も調査地として選定し案内をしている。なお、俳句門弟の会に牧馬會があり、尖石遺跡の調査を行った宮坂英式や小平幸衛はこの会に属している。また、他の会員も尖石遺跡の調査を手伝いに訪れたことが記録に残されている。

小平定太は小平禎三の三男で南大塩に住み医院を開業し、兄の影響か考古学に興味を持ち、遺物採集等を行っている。昭和4年7月30日宮坂英式と小平定太の子息貞樹と共に尖石遺跡の調査を行っている。その後、昭和15年の東京考古學會例会の調査や昭和11年東伏見宮の調査にも参加している。

## 第2節 大正時代 尖石遺跡の研究者

### 1. 『諏訪史』第1巻編纂と尖石遺跡の発掘調査に関わった人々

大正7（1918）年郡史編纂を目的に諏訪史談會が結成される。史談會は当時の教員や郷土史家により構成され、諏訪郡内の遺跡・史跡実踏を行い、各地区に所在する文化財の調査報告『諏訪史蹟要項』を刊行している。大正11（1922）年4月に後に八幡一郎が発表した土偶を発見した画家の宮坂春三や、遺構測量に従事した矢島数由も諏訪史談會の会員であった。

宮坂春三は宮坂英式と親戚関係にあり、『續 諏訪雅人傳』（文献:8）には石井柏亭、岡 精一に師事し二科展などに絵画を出品、日本水彩画会員に所属した洋画家と記されている。白樺派に傾倒し大正7年『新しき村』8月號の同志43名中に「諏訪郡豊平村広深山 宮坂春三」（文献:9）とあり、尖石遺跡内にアトリエを構え居住していたようである。また、俳句同人として宮坂英式の俳句に俳画を書き添えるなど共に活動をしている。

『諏訪史』編纂の信濃教育會諏訪部會には多くの教職員が所属し関わっている。大正12（1923）年地方委員小池安右衛門・牛山茂樹・山田茂保・小口珍彦・細川隼人・小林千代丸などの諏訪郡内教員が丸となっ

て遺跡調査に取り組んでいたことがわかる。また、明治2（1868）年岡谷市に生まれ、郡内の教職を歴任し、諏訪史主任編纂委員・史蹟名勝天然記念物調査員であった今井眞樹も、古くから尖石遺跡の重要性を把握・認識していた一人で、昭和8（1933）年8月の長野縣保存史蹟指定や昭和15（1940）年の国史蹟指定申請に尽力している。

### 鳥居 龍蔵（1870～1953）

大正7年『諏訪史』第1巻の編纂事業が計画され、諏訪史編纂東京主任であった今井登志喜は、東京帝國大學講師であった鳥居に『諏訪郡史』第1巻の編者を依頼している。諏訪郡史は信濃教育會諏訪部會が組織した地方委員、古墳調査委員等に加え、先史時代の部を八幡一郎（当時諏訪中學校在学）、原始時代の部を東京帝國大學人類学教室専科生小松眞一が鳥居の助手となり一部を起草している。

『諏訪史』第1巻は、以前は広見の遺跡と紹介されていた中で、尖石、と最初に冠して尖石遺跡を紹介した書籍で、「第3章先史時代遺跡の存在地」に「10 豊平村南大塩<sup>とがりいし</sup>尖石遺跡」（文献:10a）として紹介し、土器等遺物の出土層位と厚手式に帰属する遺跡であること、遺跡南側斜面に立つ巨石、尖石、土偶の出土状態について着目している。特に鳥居は、尖石、について「12 巨石文化」の項を起し、尖石周辺で出土した土偶・奇妙な土器等と考え併せ、尖石を宗教的信仰の標章と考え、巨石文化の存在にまで言及している（文献:10b）。この考え方は後の宮坂にも引き継がれている。



### 今井 登志喜（1886～1950）

第3図 昭和17年8月19日渋谷敬三、今井登志喜他尖石遺跡踏査時記念写真（左側 渋谷敬三・右側 今井登志喜）

明治19年、岡谷市に生まれ諏訪中學校で宮坂英式と同級となる。明治44（1911）年東京帝國大學文學部史學科を卒業し、大正7年には『諏訪史』第1巻編纂中央委員として、鳥居龍蔵に編纂・執筆を依頼するなど考古学にも関心があったものと推察される。

昭和5（1930）年から東京帝國大學教授として、西洋史を中心に都市の發達史、イギリス社会史などの研究に取り組んだ。昭和14（1939）年から昭和19（1944）年まで東京帝國大學文學部長を務め、著作には「歴史學研究法」（文献:11）等がある。昭和15（1940）年財団法人國民學術協會員となり、今井の斡旋により昭和16（1941）年尖石遺跡の調査は、協会の研究補助金事業として採択され交付金を受けている。この時の申請者に宮坂英式・八幡一郎・今井登志喜が名を連ねている。

昭和17年文部省宗教局史蹟調査嘱託であった齋藤 忠に尖石遺跡を史蹟指定調査に訪れるよう助言を与えたのも今井である。

昭和22（1947）年静岡県登呂遺跡の發掘調査で登呂遺跡調査会の委員長になるなど、終始集落の歴史的研究に興味を抱いていたことがわかり、宮坂の尖石遺跡での縄文時代集落研究には大きな期待を抱いていたものと想像できる。



昭和32(1957)年に竣工した尖石考古館研究室には、今井の肖像写真が掲げられ宮坂は「今井先生は尖石の恩人だ。」と常に語っていたといわれている。



八幡 一郎 (1902~1987)

第4図 昭和16年6月15日尖石遺跡19号住居址発掘記念写真  
(左側 八幡一郎・右側 宮坂英式・後方 矢島数由)

明治35(1902)年、岡谷市に生まれ諏訪中學校へ進学。宮坂英式の諏訪中學校後輩にあたる。諏訪中學校時代、鳥居龍藏『諏訪史』第1巻編纂の地元助手として活躍し、編纂事業の一環で大正9(1920)年初めて尖石遺跡で学術的な発掘調査を行っている。大正11年8月には地元画家の宮坂春三採集の土偶を貰い受け「信濃諏訪郡豊平村廣見發見の土偶」(文献:12)と題して資料紹介をしている。現在この土偶は東京大学総合研究博物館に所蔵されている。

大正10(1921)年東京帝國大學理学部人類學教室専科に入学し、昭和1(1926)年千葉県市川市姥山貝塚を東京人類學會遠足會、東京帝國大學人類學教室で、23ヶ所の竪穴住居址を発掘調査し「下總姥山貝塚發掘調査豫報」(文献:13)を宮坂光次と共に報告している。この報告が日本最初の学術的な竪穴住居址の調査報告となる。この調査経験に基づき昭和11年8月の尖石遺跡發見の石囲炉と柱穴との関係を竪穴住居址として宮坂英式に指導している。宮坂英式が報告書内で土坑に竪穴の名称を用い、住居址番号をローマ数字で表現するのは、八幡一郎が報告した姥山貝塚の影響によるものかと思われる。

宮坂英式が昭和5年尖石遺跡に於いて發見した顔面把手の報告を、八幡が昭和4年に神津 猛等と立ち上げた「信濃考古學會」の会誌『信濃考古學會誌』第3年第1輯に「顔面把手發掘手記」として発表し、これを契機に宮坂英式との親交が始まっている。

昭和14年、長野県内で最初の縄文時代竪穴住居址の発掘調査となった、豊平日向上遺跡の調査指導を八幡と共に東京帝國大學理学部人類學教室嘱託酒詰仲男が行っている。その後、宮坂の尖石遺跡発掘の大きな力となり、何回も遺跡を訪れ中央学会と宮坂をつなぐ重要な役割や学問的な支えとなり、史蹟指定に際しても文部省宗教局保存課史蹟調査嘱託齋藤 忠などと連絡を取り合いながら尖石遺跡の保護・保存に奔走している。

また、昭和16年には今井登志喜と共に共同研究者として、宮坂英式が行っていた尖石遺跡の調査を支えるため、財団法人國民學術協會からの補助金申請を行ったりしている。

昭和26(1951)年東京国立博物館学芸部考古課長を務めた際には、戦後初の考古遺物による特別展「日本古代文化展」を開催し、尖石遺跡の出土品の展示を行っている。

昭和27(1952)年の第1回から3回まで尖石大学講座の講師も務め、尖石遺跡の調査報告書である『尖石』の刊行にも始終気に向け、発刊に向けて尽力している。

晩年の昭和44(1969)年の茅野和田遺跡の発掘調査では、調査委員会顧問として宮坂英式と共に発掘調査に立ち会い、宮坂英式の亡くなった後も宮坂の業績をまとめるべく、『尖石考古館図録』の監修に携わる

などしている。

### 第3節 昭和初期 尖石遺跡の調査・研究者

#### 1. 昭和初期の調査に関わった人々

昭和4年の伏見宮博英の調査が一つの契機となり、尖石遺跡の調査が盛んになる。宮坂が最初に行った尖石遺跡の調査は昭和4年7月30日で、小平雪人の弟で豊平村の開業医小平定太とその子息貞樹と共に実施している。この後小平定太は昭和14年4月豊平村日向上遺跡の調査、昭和15年の東京考古學會の調査等に参加し宮坂と共に遺物の蒐集に努めている。なお、尖石遺跡出土とされる「壺抱き土偶」は小平定太のコレクションであり、現在東洋観光事業株式会社で所蔵されている。

昭和5年7月22日から8月13日の間、宮坂英式は小平幸衛と山道脇・雜司久保堰脇の調査を行い大量の遺物と、石囲炉址・地床炉址20ヶ所を検出し、7月28日からは豊平尋常高等小學校今井広亀（弘樹）主席訓導等が加わり、更に炉址2ヶ所を検出している。この際今井はガラス乾板写真を記録として残し、調査の内容をまとめガリ版刷りで、地図入り、写真図版19葉の報告概要を、今井弘樹のペンネームで昭和5年10月に20部発行している。また、翌昭和6（1931）年1月には「諏訪郡尖石遺跡の發掘について」（文献:14）の調査概要を発表している。この後も昭和15年の東京考古學會の調査等にも参加し、後には諏訪郡内の郷土史に関する多くの著作を残している。



伏見宮 博英（1912～1943）

第5図 昭和4年7月24日伏見宮尖石遺跡調査風景写真（中央 伏見宮博英）

旧皇族伏見宮博恭の四男として生まれた。学習院中等部時代に考古学に興味を抱き関東方面の遺跡調査を行っている。昭和4年1月東京京橋高島屋呉服店で開催された『原始文化展覧會』で龍谷文庫蒐集品を見た遺物蒐集家上羽貞幸の勧めで、昭和4年7月諏訪郡内の遺跡調査を実施している。7月24日尖石遺跡の發掘調査を行い、この發掘調査に宮坂英式・藤森栄一が参加している。この時の調査の様子を両角守一・小平雪人が雑誌に投稿し、發掘調査に参加した藤森栄一も回想録「ある考古少年の灯—伏見博英君の思い出」（文献:15）に当時の調査の様子を残している。

この調査を記念して伏見宮博英王殿下御臺臨之地と記した記念碑が、昭和5年5月16日尖石遺跡調査地点に建立され除幕式が挙行されている。また、同様の臺臨之地記念碑は、昭和4年7月に伏見宮が調査した下諏訪町駒形遺跡にも建立されている。

なお、伏見宮による調査以降旧皇族・皇族による調査が尖石遺跡では数回行われ、昭和11年10月には東伏見宮邦英が第28号住居址附近を、昭和29（1954）年7月には三笠宮崇仁が第33号住居址の發掘調査を行っている。

#### 2. 昭和10年以降から終戦までの調査に関わった人々

## 別編1 尖石遺跡・与助尾根遺跡発掘調査に関わった人々

昭和15年以降尖石遺跡の発掘調査は宮坂家を中心となり、特に宮坂英式の4人の子息吉久雄、長久、虎次、昭久は大きな力となり調査を手伝っている。昭和8年8月13日の蛇体把手付深鉢出土時の写真に13歳の長男吉久雄が映り、これ以前にも昭和5年9月からの調査などに同行していることをみると、調査戦力として子どもたちの力は大きかったことが窺え、調査日誌に度々子供を同行して調査をする様子が書かれている。なお、吉久雄は昭和18年長野縣師範學校卒業後、昭和22年東京大学理学部に内地留学し考古学を学び、その後豊平小学校に奉職し与助尾根遺跡の調査の中心となるが、昭和24(1949)年夭逝する。

その後、三男虎次が宮坂英式の跡を継ぎ、八ヶ岳西山麓の考古学調査や尖石考古館建設、尖石考古館長として尖石遺跡の保護・保存・公開に携わり、現在の尖石縄文考古館の基礎を築いた。また、『茅野市史』上巻に於いて宮坂英式の考古学上の業績である八ヶ岳西山麓に点在する遺跡の性格や調査歴をまとめ執筆編纂に携わったが、上梓を前に昭和59(1984)年逝去している。

宮坂の集落調査は前述した矢島による測量とその成果である測量図に加え、南大塩で写真師を開業していた牛尼政一等による発掘調査の記録写真が研究資料として大きな役割を果たしている。宮坂の記録によると高い梯子上で撮影作業を行うなどして、現在の住居址写真と大過ない遺構写真を撮影している。また、牛尼等が撮影した大判写真は、宮坂英式が調査成果を報告した各種雑誌や、昭和32年に刊行された調査報告書『尖石』写真図版にコロタイプ印刷として用いられるなど、調査や遺構の状況を生々しく伝える貴重な資料として残されている。

なお、昭和32年以降与助尾根遺跡の遺構写真や出土土器写真は、絵葉書『尖石繪はがき』の原板としても利用され第3集まで発行され、土産物として尖石考古館横の売店で販売していたようである。

この他にも戦時下で食糧増産が叫ばれていた時代、発掘調査のため畑を提供し、国史蹟指定に向けて応援を惜しまなかった地元豊平村民や、昭和15年東京考古學會等の大規模調査が計画された際に調査を手伝った学校の生徒や教員、牧馬會同人等多くの人々の支えがあり調査が達成できたもので、昭和15・17年の大山史前學研究所の調査に際しても、同様に地元の支援があったものと考えられる。

また、宮坂と諏訪中學校の同級生であった酒造会社社長高橋巳喜之助は、物心両面から援助し、研究費の工面等を行い、度々調査現場にも赴き宮坂の調査を激励している。

昭和3(1928)年片倉製糸二代目片倉兼太郎が諏訪湖畔に保養施設片倉館を建て、これに昭和15年片倉郷土館が併設され、諏訪郡内の縄文時代から古墳時代に亘る遺物の展示館が建設される。宮坂も尖石遺跡の資料展示で関わっている。このような関係から昭和15・16年の尖石遺跡で調査された遺物が展示された。現在この時展示した遺物が財団法人片倉館に所蔵されているのはこのような経緯からである。なお、片倉郷土館建設事業には諏訪史談會員矢崎源蔵、内田利雄、矢島数由等が関わり、尖石遺跡の発掘調査にも度々訪れている。

また、諏訪史談會の遺跡踏査会や調査報告を含めた講演会なども行われ、広く宮坂英式の調査成果は公開され関心のある多くの教員や村人が尖石遺跡に赴いている。

また、考古学界にも広く尖石遺跡の発掘調査を公開し、昭和15年6月、藤森栄一の計画で第17回東京考古學會例会が尖石遺跡で開催された際には、東京考古學會後藤守一・杉原莊介・和島誠一・神林淳雄・岡本健児・佐野大和等が訪れ発掘調査をしている。

昭和17年5月10日には東亜考古學會島村孝三郎主事、昭和18(1943)年東京帝國大學考古学教室教授原田淑人、東京帝國大學文學部講師駒井和愛、関野<sup>たけし</sup>雄、島村孝三郎による東亜考古學會の实地踏査が行われるなど、当時東京方面で活躍していた考古学研究者の多くが尖石遺跡を訪れている。





宮坂 英式<sup>ふさかず</sup> (1887~1975)

第6図 昭和15年6月22日尖石遺跡第4号住居址記念写真(中央 宮坂英式)

明治20(1887)年3月4日南大塩に生まれる。明治38(1905)年諏訪中學校を卒業。上京し苦学した後帰省。大正11年泉野尋常高等小學校に奉職。大正13(1924)年俳人小平雪人に俳句を習い始め、英一と号して牧馬會に所属する。昭和4年小平雪人がコーディネートした伏見宮博英の尖石遺跡調査の手伝いに赴き、これを契機にその後尖石遺跡の調査を行うこととなる。

調査当初は雑司久保堰沿いや山道沿い(市道甲1号線)や、尖石、下の水路沿いでの遺物採集、石囲炉址の調査が中心であったが、昭和15年以降縄文時代集落の解明へと傾倒し、環状集落の構造と集落を取り巻く領域を昭和17年にモデル化し領域論の先駆けを発表している。

文化財保護についても昭和17年尖石遺跡、上之段遺跡を国史蹟指定に、昭和27年には尖石遺跡を縄文時代の集落として最初の国特別史蹟指定へと導いている。また、昭和21年から27年まで与助尾根遺跡で継続された発掘調査により、ほぼ縄文時代中期集落の全容が把握され、当時建築史研究の先鋭であった関野克・藤島亥治郎・堀口捨己に竪穴住居址の上屋構造について指導を仰ぎ、遺跡内に複数棟の復原家屋を建て、縄文時代中期のムラを周囲の景観と共に屋外に展示したことは、現在の史蹟整備の先駆けと言っても過言ではない。また、豊平村と共に遺物収蔵施設の建設にも主体となり、尖石考古館の基礎を作り上げ初代尖石考古館長に就任、昭和42(1967)年茅野市名誉市民となっている。

尖石遺跡・与助尾根遺跡の調査だけではなく、調査の足跡は八ヶ岳山麓全域に亘り、昭和11年当時喜田貞吉と山内清男を中心に、縄文時代の下限についての論争「ミネルヴァ論争」が起り、宮坂は上之段遺跡で縄文時代土器包含層から宋銭が出土したことを「宋銭發掘記」(文献:16)として発表し、この発表が喜田説を裏付けることとなった。

また、昭和31(1956)年以降旧石器時代遺跡の調査を行い、冷山黒曜石原産地直下の渋川遺跡や、白樺湖周辺遺跡調査にも着手し、幅広く八ヶ岳西麓の考古学調査研究に携わっている。



小平 幸衛 (1885~1955)

第7図 昭和17年9月24日尖石遺跡独立土器完掘記念写真(左側 小平幸衛・右側 宮坂英式)

明治18(1885)年に南大塩村に生まれ農業に従事しながら、小平雪人が主宰した俳句子弟の会であった牧馬會に属し雅号を三江と号し宮坂ともに同門であった。昭和5年6月、尖石遺跡内2906番の桑畑改植中だった小平が発見した焼土周辺を宮坂と発掘調査し、完形土器1と炉址9の発掘を端緒に、その後宮坂と共に尖石遺跡・与助尾根遺跡の調査を行い、昭和5年11月には、尖石、西下崖から顔面把手付土器片等を発掘し「顔面把手發掘手記」(文献:17)として共著で報告

している。その後も宮坂の発掘調査を手助けし、良き調査協働者として長年に亘って調査を支えている。



矢島 数由 (1894~1965)

第8図 昭和17年5月9日八幡一郎・島村孝三郎踏査時記念写真

明治27年永明村駅前に生まれ、諏訪中學校卒業後、農業の傍ら多くの学問に親しみ、測量士の免許取得や、歴史、岩石、植物について学んでいる。この成果は私蔵版の雅号如雲を採った『如雲諏訪史抄』と題した和綴じ本にまとめられている。この本は遺跡編、石器編、建築彫刻編、城塞編等20冊に及び郡史資料集の様相を呈する。『竪穴考』には尖石遺跡等の住居址実測図が、詳細な観察事項と共に筆で描かれ、遺構の高低が着色表現されている。

宮坂英式との関わりは、昭和14年4月29日、30日に実施された豊平日向遺跡の竪穴住居址の実測からで、竪穴住居址の平板測量図に測量者として矢島の名前が記されている。その後尖石遺跡・与助尾根遺跡の測量に大きな役割を果たした。遺品には、住居址の平面図とその縮小、合成により遺構全体図があり、更に地形図と遺構全体図が合成された遺跡全体図もある。地形図内に住居址の重複する様子や、土坑・列石の集落構造を組み込んだ遺跡全体図は、遺跡の全体像を示す重要な資料となり、宮坂の尖石遺跡調査報告の際に挿図として用いられ、集落像を巨視的に示したのものとして高く評価することができる。

矢島資料には昭和9(1934)年以降永明村塚原等で採集した石鏃等石器を1点ごと台紙に縫い付けた標本や、昭和6年11月には永明村横内下蟹河原地籍で発見された古墳時代の遺物を発掘調査し、その様子を略測図として残している。この調査の成果はその後藤森栄一により「信濃下蟹河原に於ける土師器の一様式」(文献:18)として発表され、その際に遺物出土状況の図として矢島が描いた略測図が用いられている。古くから歴史・考古学に興味があったことと思われ諏訪史談会にも属している。

当時諏訪史談会が編纂していた『諏訪史蹟要項』に関する挿図が『如雲諏訪史抄』に採録されている点、



『諏訪史蹟要項』挿図下絵が残されている点などから、同書の遺物・遺構実測図作成に矢島が関わっていた可能性が考えられる。また、山城である上原城測量図なども作成している。このような諏訪史談会の活動を通じて日向遺跡の遺構実測に赴いたものと考えられる。

なお、昭和17年9月、尖石遺跡の調査の影響を受けてか泉野日鳴寺遺跡の調査を行い、「先史時代住民の残した日鳴の住居址」(文献:19)と調査成果を、昭和18年2月「全国梵鐘調査録」(文献:20)では全国梵鐘銘文集成に際し諏訪郡内の梵鐘銘文を報告しており、太平洋戦争軍事供出以前の梵鐘銘文記録として貴重な資料を残している。

藤森 栄一 (1911~1973)

第9図 昭和15年6月16日第7回東京考古學會例会記念写真(後左側 藤森栄一・後右側 神林淳雄)



明治44年上諏訪町に生まれ、諏訪中學校に入学。この頃から地元考古学研究者両角守一の教えを受け、論文を書くような考古学ボーイであった。昭和4年両角守一等が案内した、伏見宮博英の諏訪郡内考古学調査の尖石遺跡発掘調査にも参加している。昭和10(1935)年6月には与助尾根遺跡で宮坂と共に石囲炉址を発掘調査しその写真を残している。森本六爾に師事し東京考古学会事務局を運営するなど、在野の考古学者として数多くの論文を発表している。昭和15年6月当時東京考古学会事務局を務めていた藤森は第17回東京考古学会例会を尖石遺跡で開催し、会員であった後藤守一・杉原荘介・和島誠一・神林淳雄・岡本健児・佐野大和等と共に第2号住居址から第4号住居址までを発掘調査している。

なお、この時の東京考古学会調査に古代集落・住居を研究対象としていた後藤守一・杉原荘介・和島誠一がいたことは、宮坂の尖石遺跡の集落調査に大きな影響を与えたものと考えられることができる。

また、昭和24年4月、与助尾根遺跡の発掘調査を継続していた宮坂を援助するため、南信日日新聞主催「尖石を守る会」のキャンペーンが行われ、この提唱者が藤森で、当時主宰した諏訪考古学研究所に所属していた諏訪清陵高校生戸沢充則を筆頭に、多くの高校生に参加の機会を与え後進の育成を図っている。



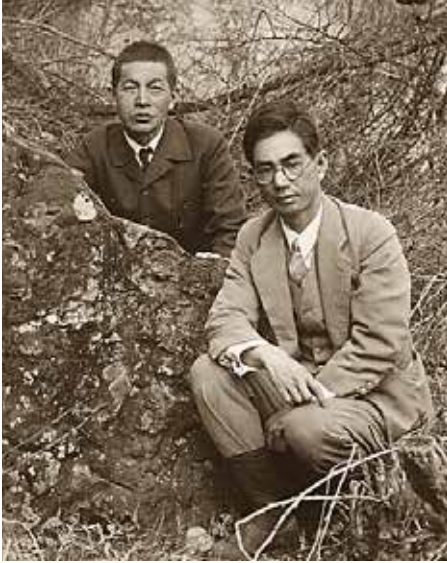
#### 大山 柏 (1889~1969)

第10図 昭和17年8月6日大山史前学研究所尖石遺跡第28号住居址・第29号住居址調査風景写真(左側 大山 柏・右側 上野廣一)

明治22(1889)年大山 巖伯爵の次男として生まれ、陸軍士官学校を卒業後、長く陸軍大学図書館に勤務し戦史について研究している。先史学に興味を抱き、ドイツ等ヨーロッパへ3回留学。当時の先進的な先史学を日本へ導入し、邸内に大山史前学研究所を開設。関東地方の貝塚資料に基づいた縄文時代土器編年を築いている。研究所には甲野 勇等の新進気鋭の研究者が在籍し、史前学雑誌を刊行している。

尖石遺跡には昭和10年、昭和15年、昭和17年と3回発掘調査に研究所員竹下次作・池下啓介等と訪れている。特に昭和15年10月には第13号住居址から第16号住居址の3軒を、昭和17年8月には第28号住居址・第29号住居址の2軒を宮坂と共に発掘調査している。この時に大山 柏が掘り上げた土器(写真下段中央・第62図11)が、現在、財団法人片倉館所蔵となり諏訪市博物館に寄託されている。

昭和10年10月の大山史前学研究所調査と宮坂との関係は不明であるが、11月5日に宮坂が大山史前学研究所を訪れていることを考えると何らかの接点があったものと考えられ、昭和11年上之段遺跡を宮坂と共に調査したに上野廣一が関わっていたものと推測される。上野は下諏訪町富ヶ丘に別荘を持っていた肖像画家で、度々宮坂の発掘調査に訪れ、尖石遺跡で調査した石囲炉址を「土器焼成に関する一考察と其の資料」(文献:21)として共に発表している。昭和10年以前の上野廣一と宮坂の関わりを示すものはなく不明である。上野廣一は岩手県雫石村出身で、洋画家山本芳翠の門下に入り、明治40(1907)年渡仏しアカデミー・ジュリアンでジャンポール・ローランス等に師事し、その後、原 敬・高橋是清等の肖像画等を描くなど著名人との関係も深く、そのような中から大山 柏との関りが生まれたものと想像できる。



齋藤 忠 (1908～2013)

第11図 昭和17年4月26日 文部省宗教局保存課史蹟調査記念写真  
(左側 宮坂英弐、右側 齋藤 忠)

明治41(1908)年北海道に生まれ、宮城県仙台市で育つ。昭和4年東京帝國大學文學部國史學科入学、在学中八幡一郎とは人類學教室で面識があった。昭和7(1932)年同大学卒業後、京都帝國大學文學部考古學研究室助手、昭和9年朝鮮總督府古墳調査囑託を経て昭和15年文部省宗教局保存課史蹟調査囑託となっている。

昭和15年東京帝國大學文學部長であった今井登志喜の仲介で尖石遺跡の国史蹟指定に関わり、昭和17年4月・8月に実地調査に来跡し、10月14日付の国史蹟指定に尽力している。戦後も昭和25(1950)年の文化財保護法制定以前から宮坂英弐とは連絡を取り合い、遺跡の保護・保存について多くの助言を与え、昭和27年尖石石器時代遺跡の特別史蹟指定にも文化財保護委員会保存部記念物課文化財調査官として関わっている。『尖石』の後記に宮坂は「齋藤先生には昭和15年来十数年に亘り尖石遺跡の保存顕彰のため心血をそそがれた。」と感謝を表している。また、昭和27年の第1回・3回の尖石大学講座の講師も務めている。なお、昭和49(1974)年には茅野市王経塚古墳の学術調査を齋藤に依頼するなど、その後も宮坂との交流が続いていた。

## 第4節 戦後の尖石遺跡・与助尾根遺跡に関わった人々

### 1. 戦後与助尾根遺跡の調査に関わった人々

昭和20(1945)年終戦を迎え、新たな教育と連動するように諏訪史談會が、尖石遺跡と隣接する与助尾根遺跡で発掘調査を計画し宮坂の指導を仰ぎ、ここに第2期の縄文時代集落の発掘調査が始まる。与助尾根遺跡での調査には、郡内・県内外の高校生や豊平村青年會等の多くの人々が関わっている。調査記録の中には後に考古学者となった戸沢充則・河西清光・宮坂光昭・増澤(林)賢などの名前が見える。

豊平村では与助尾根遺跡に復原家屋の建立や、案内板、見学道整備、遺跡の公有地化を図り、遺跡の史蹟公園の先駆けとして整備し保護・公開を行い、特に昭和27年尖石遺跡が国特別史蹟に昇格する際、「特別史蹟指定記念古代文化講座」を開講し中央学会の講師陣(藤田亮策・八幡一郎・齋藤 忠・小林行雄・黒板昌夫)による歴史講座を開催、約1,000人にも及ぶ聴講者が詰めかけている。このような遺跡の保護・保存・公開の大きな原動力は、当時豊平村村長であった小平吉一の力によるところが大きい。小平は宮坂と同じく牧馬會に属し様々な面で宮坂の援助を行い、豊平村を挙げて尖石遺跡を世に出そうと尽力している。昭和30(1955)年には尖石考古館出土品収蔵庫、昭和32年研究室機能を持つ本館の建設、尖石保存會・尖石後援會を組織するなど史蹟整備に努め、小平自らも尖石遺跡への道筋に桜を植樹し環境整備に努め、現在でも桜並木は「吉一桜」と呼ばれ親しまれている。これらの尖石遺跡に係わる保護・保存・公開・活用は豊平村と豊平村民の理解と協力がなければ成し得なかった。

また、尖石遺跡・与助尾根遺跡の調査成果は考古学の分野だけではなく、建築史の中でも重要な意味を持っている。実際発掘調査された竪穴住居址の所見に基づき縄文時代の復原家屋上屋構造設計を、昭和15

年当時縄文時代の復原住居を研究していた東京帝國大學工学部助教授関野<sup>まさる</sup>克が、宮坂英式の依頼を受け尖石遺跡第4号住居址の測量図に基づき上屋復原設計図と粘土で模型製作を行っている、昭和24年9月には東京大学工学部講師堀口捨己が与助尾根遺跡第7号住居址の上屋設計図、11月には東京大学工学部教授藤島亥治郎が遺跡を訪れ復原家屋の設計プランを考案している。このように昭和20年代縄文時代の住居址上屋構造設計に、当時新進気鋭の建築史家3名関わったことは注目すべきことであり、この上屋設計に基づき与助尾根遺跡の竪穴住居址上に復原家屋が構築され、堀口・関野・藤島の各設計に基づいた複数の復原住居が遺跡現地に建てられている景観は、史跡公園整備の嚆矢であったと言っても過言ではない。

なお、縄文時代与助尾根遺跡の復原家屋設計案を堀口が、弥生時代の静岡県登呂遺跡では関野、古墳時代では長野県平出遺跡で藤島が関わり、各自設計案を昭和26(1951)年『建築雑誌』774号(文献:22)に発表したことは、縄文時代から古代の復原家屋設計研究に関わる特筆すべき事柄である。

## 2. 尖石遺跡、与助尾根遺跡の出土品と芸術家

尖石遺跡、与助尾根遺跡の出土品収蔵庫として昭和30年に尖石考古館が開館し、展示されていた土器等は、芸術関係者の注意を惹き、小平雪人を中心とする牧馬會では俳句題材となり、数多くの俳人が取り上げている。中でも小平雪人や小平三江(幸衛)などは多くの句会で尖石を題材に採った俳句を残している。



第12図 昭和36年9月7日民藝運動陶芸家考古館見学(左側 濱田庄司、中央 バーナード・リーチ)

昭和34年以降東京等に於いて縄文土器展が数多く行われ注目を浴び、昭和36(1961)年『民藝』87号に縄文土器特集号が生まれ、同年9月には民藝運動を推進していた陶芸家濱田庄司、陶芸家バーナード・リーチ等が尖石考古館を訪れている。

また、昭和35(1960)年には華道小原流家元小原豊雲による縄文土器と生花との合体作、写真家土門拳による土器撮影など芸術の題材として尖石考古館の土器が用いられている。昭和41(1966)年4月には近代映画社監督新藤兼人により、縄文土器の造形と宮坂英式に焦点を当てた映画『尖石』が制作されるなど、芸術のテーマとして尖石遺跡が取り上げられ芸術関係者にも多くの影響を与えている。

(守矢昌文)

## 注 釈

註:1 関連人物の写真については、茅野市尖石縄文考古館で所蔵している宮坂英式資料の写真紙焼きの関連人物部分についてトリミングを施し掲載している。なお、小平小平治については、該当する資料がなかったために文献2の複写物からデータ化した。

## 参考引用文献

(文献:1) 鵜飼幸雄 平成24(2012)年3月「木川寅次郎と中原遺跡—八ヶ岳山麓考古学研究の深淵—」『尖石縄文考古館開館10周年記念論文集』茅野市教育委員会 98・99頁



別編1 尖石遺跡・与助尾根遺跡発掘調査に関わった人々

- (文献:2) 勝田寫真館 昭和9(1934)年5月『二七會記念御寫真帖』2頁
- (文献:3) 宮下健司 昭和63(1988)年3月「(2)長野県考古学史年表」『長野県史』全1巻(4)遺構・遺物 長野県史刊行会 13頁
- (文献:4) 阿心庵雪人編輯 明治30(1897)年11月『校註燕村全集』上田屋書麿
- (文献:5) 松尾芭蕉著 老鼠堂永機・阿心庵雪人校訂 明治30(1897)年7月『芭蕉全集』博文館
- (文献:6) 榎本其角著 老鼠堂永機・阿心庵雪人校 明治31(1898)年2月『其角全集』博文館
- (文献:7) 江見水蔭 明治45(1912)年5月「珍品集」『探検實記 地中の秘密』博文館 296-298頁
- (文献:8) 平澤芳邨 昭和25(1950)年7月「宮坂春生」『續 諏訪雅人傳』甲陽書房 108頁
- (文献:9) 永島直昭 大正7(1918)年8月『新しき村』第1年8月號 新しき村社
- (文献:10a) 鳥居龍藏 大正13(1924)年12月「第三章先史時代遺跡の存在地 一〇豊平村南大鹽廣見尖石遺跡」『諏訪史』第1巻 信濃教育會諏訪部會 44-47頁
- (文献:10b) 鳥居龍藏 大正13(1924)年12月「結論 十一巨石文化」『諏訪史』第1巻 信濃教育會諏訪部會 384-385頁
- (文献:11) 今井登志喜 昭和10(1935)年10月「歴史學研究法」國史研究會編『岩波講座 日本歴史I』株式会社岩波書店
- (文献:12) 八幡一郎 大正11(1922)年8月「信濃諏訪郡豊平村廣見發見の土偶」『人類學雜誌』第37巻第8號 日本人類學會 270-274頁
- (文献:13) 宮坂光次・八幡一郎 昭和2(1927)年1月「下總姥山貝塚發掘調査豫報」『人類學雜誌』第4巻第1號 日本人類學會 1-28頁
- (文献:14) 今井弘樹 昭和6(1931)年1月「諏訪郡尖石遺跡の發掘について」『信濃考古學會誌』第2年5・6輯 信濃考古學會 146-164頁
- (文献:15) 藤森栄一 昭和42(1967)年7月「二 ある考古少年の灯」『かもしかみち以後』學生社 30頁
- (文献:16) 宮坂英式 昭和11(1936)年9月「宋錢發掘記」『ミネルヴァ』9月號第1巻第7號 翰林書房 1-4頁
- (文献:17) 宮坂英式・小平幸衛 昭和7(1932)年3月「顔面把手發掘手記」『信濃考古學會誌』第3年1輯 信濃考古學會 15-17頁
- (文献:18) 藤森栄一 昭和14(1939)年10月「信濃下蟹河原に於ける土師器の一様式-諏訪地方古墳の地域的研究の補彙(1)-」『考古學』第10巻第11號 東京考古學會 556-563頁
- (文献:19) 矢島數由 昭和17(1942)年9月「先史時代民の殘した日鴨の住居趾」『郷土』第4巻第38號 信濃民友社 36・37頁
- (文献:20) 矢島數由 昭和18(1943)年2月「全国梵鐘調査録 信濃」『古代文化』第14巻第2號 日本古代文化學會編輯 73頁
- (文献:21) 上野廣一・宮坂英式 昭和11(1936)年12月「土器焼成に關する一考察と其の資料」『ミネルヴァ』12月號第1巻第8號 翰林書房 8-16頁
- (文献:22) 堀口捨己 昭和26(1951)年5月「尖石の石器時代住居とその復原」『建築雜誌』774号 日本建築学会 1-6頁  
關野 克 昭和26(1951)年5月「登呂の住居址による原始住家の想像復原」『建築雜誌』774号 日本建築学会 7-11頁  
藤島亥治郎 昭和26(1951)年5月「平出聚落址に於ける住宅の復原」『建築雜誌』774号 日本建築学会 12-19頁